



ばんりよく 万緑の 中や吾子の歯 生え初むる (中村草田男)



新学期が始まり、早いもので2か月が過ぎようとしています。小学一年生のランドセル姿も板についてきました。子どもたちは、先生に慣れ、友達にも慣れ、学校に楽しく通っています。登下校中の子どもたちの顔を見ては、元気をもらっているのは私だけではないでしょう。

しつけ方について考える

覚えておられるでしょうか？

「育成センターだより第5号」で“しつけ3原則”（教育学者 森信三）について記載しました。しつけ3原則とは・・・

- 1 朝のあいさつをする子に
- 2 「ハイ」とはっきり返事のできる子に
- 3 席を立ったら必ず椅子を入れ、はきものを脱いだら必ずそろえる子に

いかがでしょうか、皆さんの周りの子どもさんはこれらが実践できていますか。

親であったり、地域のおじさん、おばさんであったり、大人である私たちは様々な立場で子どもに関わっています。子どもたちにどのように関わっていけばいいのか考えてみましょう。

子どもがしてはいけない行動をとった時にはきちんと「いけない」と注意をしなければなりません。ならぬことはならぬものです。それが親であり、大人である私たちの役目です。子どもは放任では育ちません。どんなしつけを受けるかで子どもの将来が決まっていくと言っても過言ではないでしょう。だから、私たち大人の責任は重たいのです。

ひと昔前までは、“しつけは厳しく”ということが言われていました。しかし、最近では“ほめて育てる”と言われ、優しく接することの方が良いように言われています。さて、厳しさと優しさ、しつけにはどちらが良いのでしょうか。

子どもには、いつも温かく受容的に接したいものです。その方がお互い気持ちが良いものです。しかし、毅然としてゆるぎない態度をとらなくてはならないこともあります。特に子どもが危険なことをしたり、人を傷つけることをしたときは「だめだ」と厳しく言わなければなりません。受容ばかりですと何をしていても許されるという甘えが出て、結局は大切な時に自分をコントロールできなくなります。しかし、厳しすぎると子どもが反抗し、言うことを聞かなくなってしまうこともあります。そこは、厳しさと優しさのバランスが必要です。叱ることの中に愛情があることが、一番大切なのです。

良いしつけには、親や大人の姿勢が大切です。親や大人ができないことを子どもにやれと言っても、子どもは「自分がやれないくせに・・・」という気持ちで聞きます。身に付くはずはありません。ぜひ、子どもたちには自らしている姿を見せてやってください。

問合せ先：防府市教育委員会生涯学習課 青少年育成センター（23-3013）